



青森県漁業士会会報

浜風

HAMAKAZE

19.4 vol.15

発行：青森県漁業士会

青森県水産振興課内

017-734-9592

編集：「浜風」編集委員会

平成18年度青森県漁業士会総会開催

平成18年5月12日(金)、青森国際ホテルにおいて、青森県漁業士会通常総会が開催されました。

平成17年度において女性の指導漁業士が2名認定され、全部で10名となったことから、これまで1名であった女性漁業士の役員数を1名増やし、役員数を現在の12名から13名とすることを内容とする規約の一部改正が提案され、賛成多数で承認されました。

また、平成17年度に新たに指導漁業士、青年漁業士に認定され、本会の会員になった方が紹介されました。



新会員の紹介

平成17年度、新たに3名が指導漁業士に、14名が青年漁業士に認定されるとともに、6名の青年漁業士が指導漁業士に移行しました。

東青漁業士会



平内町漁協
三津谷 秀子

この度指導漁業士に認定されました平内町漁協の三津谷です。毎年変化の激しい漁場で、ホタテ養殖を主体に夫と二人で励んでいます。

これからは女性の立場で、いろんな問題や、意見など、関係者の方々と共に協力をして、少しでも地域の活性化の役に立てる様に、頑張りたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。



平内町漁協
船橋 克美

陸奥湾という最高の環境でホタテ養殖業を営んでいる私は、さらなる自身のスキルアップを図るため、青年漁業士講座を受講し、認

定していただきました。10年という経験があるとはいえ、日々勉強に励む毎日です。漁業士活動に率先して参加し、自分自身と漁業の発展に努めていきたいと思っています。



蓬田村漁協 大宮 千恵子

蓬田に女性部ができたおかげで、勉強する機会が与えられ、理事会や総会の傍聴、業者会議への参加、ホタテの入札会、一泊二日の視察研修など体験させてもらいました。

今後も女性部とタイアップしながら、漁業士として自分にできることから事業に取り組み、知識を身につけたいと思っています。女性漁業士の方々の活発な意見や活動を聞き、漁業に対して、とても前向きな女性達だと感心しました。この姿勢を見習って、頑張りたいものです。



平内町漁協
阿部 正人

今年度から漁業士に認定された平内町清水川地区の阿部正人です。担当普及員を信頼して漁業士になりました。しかし、今年度は当地区から漁業士が4名も出て(しかも一番年上)、また、清水川地区の研究会の会長は指導漁業士(江戸照正)であるため、責任感を感じていつも漁に出ています。とにかく後輩をよく面倒見て私なりの指導(良いことや悪いことを含めて)をしますので、漁業士の先輩方、私を含めた当地区の漁業士をよろしくをお願いします。



平内町漁協
船橋 智

昨年度漁業士に認定されました。清水川支所の船橋智です。この前のボーリング大会の時、各支所の方々と話して、ホタテにも色々なやり方があるんだなと思いました。とても参考になりました。今後は、漁業士会のみなさんと、ホタテ産業発展のために、切磋琢磨し頑張っていきたいと思います。



野辺地町漁協
柴崎 秀生

指導漁業士になった野辺地町漁協の柴崎です。また、東青漁業士会の役員を兼任しております。18年度から当会では久慈新体制になりました。全力で久慈会長を支え、当会の発展に貢献して行きたいと考えています。今後ともよろしくお願い致します。



平内町漁協
田村 和義

今年から、青年漁業士になった平内町漁協の清水川支所の田村和義です。漁業士になった今年度からラーバ調査を担当するようになりました。清水川地区では、現在いる青年漁業士5名でサンプリングから検鏡まで力を合わせて行っています。今後ともよろしくお願い致します。

むつ支部会



川内町漁協
上小倉 良次

3日間の研修を終え、青年漁業士に認定されたことにより、仕事に対する取り組み姿勢、向上心が今以上に増した思いです。また漁業士会、漁協等の研修会、活動、イベント等に参加し、自己の啓発、仕事も努力していきたいと思います。



脇野沢村漁協
清藤 裕造

この度、青年漁業士の認定を受けました脇野沢漁協所属の清藤です。どうぞ宜しくお願いいたします。まだまだ未熟者ですが漁業士会の活動に積極的に参加し水産業に対する知識、交流を皆様方とともに深めていきたいと思います。



川内町漁協 光谷 武男

この度、青年漁業士に認定されたわけですが、大変責任感と重圧を感じております。その反面、今まで以上に仕事に対し、張り合いができました。健康で体の続く限りバリバリ働くつもりです。仕事も大切ですが、漁業士会の活動、それから漁業士会のみなさんを私の財産といたしたいと思います。これからよろしく申し上げます。



横浜町漁協
森川 未勝

昨年、父が病気で倒れ、今年、私が後継者になりました。今、未来を見通しながら、親元でホタテ養殖18年で得た知識を基にホタテの生育を自分なりに試行錯誤し、また、管内の子供たちと海洋実習で交流を深める等、漁協青年部活動と指導漁業士の方々と情報交換しつつ、地域に広めていきたい。家族を守り、生きる海にしたい。



野牛漁協
伊柳 晴美

18年1月に指導漁業士に認定され、身に余る思いがあります。思えば平成5年に青年漁業士に認定された当時は、ただ漁をすれば良いという気持ちだけでした。それが、数年前から気持ちが変わり始めたのです。皆さんもご存じの通り、年々減少の傾向にある漁獲の低迷、輸入量の増加による魚価の低迷、数年前からの大型クラゲの来遊、さらに、今年度の原油価格の高騰と自然災害・社会情勢の悪化と我々漁業者にとっては年々、非常に厳しい状況となっております。

こうした状況の中で、今回指導漁業士という立場で、いろいろな関係機関の方々と話し合い、漁業に従事する者の悩みや問題点の打開策を見つけ出し、指導していくことこそが我々指導漁業士の使命だと思っておりますので、これからもよろしくお願ひ致します。



川内町漁協
菊池 昭博

この度は、漁業士の認定誠にありがとうございます。ふり返ってみると、私の漁業の基本となる水産修練所（海洋学院）を卒業後、漁業者として二十余年たちます。

毎日が忙しく、大変、充実したように感じます。私にとって今回の漁業士認定というのは漁業者としての成人式のようにも思えます。漁業士の名にはじめよう、大人の一漁業者としてがんばりたいと思っております。何かとご指導のほどよろしくお願ひします。



川内町漁協
菊池 傑

私は漁業士に認定され、今までよりだいぶ人前に出る機会が増えました。今後は、若い人達に、漁業の楽しさを伝えられたら良いと思います。

（自分の子供も含めて）ホタテ漁業 = 重労働というイメージを何とか変える様に他の人達と意見交換しながら漁師の楽しさを伝えられたら良いと思っています。



横浜町漁協
中山 智昭

漁協青年部の役割の他、新たに漁業士としての立場を活かし、様々な地区の取組みを学び、地元漁業の発展に貢献していきたいと思ひます。

三八漁業士会



八戸市鮫浦漁協
関野 稔

この度、青年漁業士の認定をいただきました。漁業士会の活動を通じ、各地域の漁業士の方々の情報交換をしながら勉強していきたいと思ひます。

各関係機関の方々や漁業士会の先輩方、ご指導の程よろしくお願ひいたします。



小川原湖漁協
沼辺 啓市

この度、青年漁業士に認定されました小川原湖漁協の沼辺です。漁業士の活動を通じ、環境問題や販売促進に取り組

んでいきたいと思ひます。今後、さまざまな勉強をし、みんなのリーダー的存在になれる様頑張りたくと思ひます。

日本海支部会



赤石水産漁協
今 弘樹

この度、指導漁業士の認定を受け、光栄に思っております。

懇親会での情報交換や意見交換などをして、大変勉強になり、今後は、漁業の振興や後継者の育成に対して、頑張っていきたいと思っております。これから宜しくお願い致します。



鯉ヶ沢漁協
齊藤 幸市

自分も、もうそんな年令になってしまったのですね。月日の経つのは早いものですね。今までも、これからも初心を忘れず努力すること、先輩方の指導を仰ぎながら、今後の活動に協力し、後継者に明るい未来があるようにと思っております。

と、先輩方の指導を仰ぎながら、今後の活動に協力し、後継者に明るい未来があるようにと思っております。



大戸瀬漁協
大川 昭一

日本海の定置網漁業は、近年、漁獲量の減少に加え大型クラゲ被害などの問題に直面しています。

これらの現象は、地球環境が変化し、海の生態系が崩れてきているためではと思います。このような環境変化と向き合い、自分なら何ができるのかを常に考える漁業士でありたいと思っております。



風合瀬漁協
山本 恵一

青年漁業士になり漁業士の方々との交流が深まり資源管理についてなど色々勉強になりました。これから仕事をす

る上で役立てていけたらと思っております。また青年漁業士として漁業の発展に取り組むと共に地域の漁師、又漁業士のみなさんと協力連携して頑張っていきたいと思っております。



大戸瀬漁協
山下 幸彦

第一期生の漁業士として認定を受けてから16年。様々な活動の中で、海洋学院生ホームステイ受入れが印象的です。定置網漁業を体験させましたが、院生たちの将来に、いずれ何かの形で役立ってもらえればと思っております。今後は、漁業士会の皆さんと一緒に交流を深めながら活動して行きたいと考えています。

支所トピックス

《農林水産祭：東青漁業士会》

11月11日～12日の2日間に渡り、青森市の産業会館で農林水産祭が行われました。東青漁業士会では、女性漁業士と共同で出展し、ホタテ販売を行いました。当日の朝獲れたばかりで鮮度抜群のホタテは、好評のうちに売り切れました。



《伝統の味・すきこんぶ缶詰：三八漁業士会》

八戸鮫浦漁協では地元沿岸で獲れた昆布（一年昆布）を味・色艶・風味豊かな缶詰に仕上げました。

中身はすき昆布、みがきニシン、ニンジンに醤油、味醂、砂糖で佃煮風に甘辛く仕立てたものです。

昆布はカルシウム、鉄等のミネラルを含んでおり、美容と健康、特に妊婦、高血圧症の方にはおすすめの食材です。

（1缶：315円です。ぜひお試し下さい。）

《将来の担い手候補達 がんばれ！！：三八支部会》



去る7月5日、階上町立大蛇小学校が船釣り体験を行いました。

協力してくれたのは、階上漁協所属 坂下利助指導漁業士を中心とした遊漁船4隻。児童(5.6年)30人を乗せ大蛇前沖に出漁、当日は霧とうねりが若干強く釣りのコンディションとしては良くはありませんでした。児童の中には「絶対船酔いする」、「揺れる船は怖い」など不安な顔を覗かせる生徒もいましたが、なかなか体験することのできない船釣り!「何事も勉強」となだめながらの船出でとなりました。

釣りの方とはいうと、船酔いする児童が続出し釣果はいまひとつ、船酔いがひどい児童を降ろすため、一端は上陸するものの釣れなかったのが悔しいのか、酔いながらもリベンジする児童もいました。さすがに、お父さん、お爺さんが漁師で時々船に乗っている児童は強かったですね。

終了後は、船頭さん達と釣ったアブラメの刺身やあら汁に舌鼓を打っていました。

《海浜清掃：むつ支部会》



今年度で6回目となる漁業士会むつ支部会の海浜清掃が6月10日、六ヶ所村泊地区において開催されました。悪天候にもかかわらず、19名の漁業士他、泊漁協、泊漁協青年部、泊漁協女性部、六ヶ所村役場、水産事務所の総勢約50名が参加の下、漁協南側周辺の100mほどの海岸線を歩き、大量のゴミを拾いました。昨年の海浜清掃のときもそうだったのですが、ロープや網の一部など漁業関係のゴミが多数見られ、漁業士としては大変残念に思います。

海の環境保全が問題となっている中、漁業者が模範となり自分たちの海を守っていくべきです。

むつ支部会ではこれからもこの海浜清掃活動を続けるとともに環境保全に対する意識の啓発に努め、漁業士がリーダーシップをとって、ゴミのないきれいな浜を守っていきたく考えています。



自慢の船

船主の平内保由貴さんは、むつ市浜奥内で父保男さん、長女夫春樹さんと親子三代で、ホタテ養殖漁業を営んでいます。

大洋丸 4.9トン(むつ市漁協)
長さ13.65m、幅3.60m、深さ0.90m
エンジン：三菱ダイヤ
S6M3J MTKL
法定馬力330kw



海洋学院生ホームステイ

平成18年度漁村交流現地派遣事業について 青森県立海洋学院 教務課長 涌坪 敏明

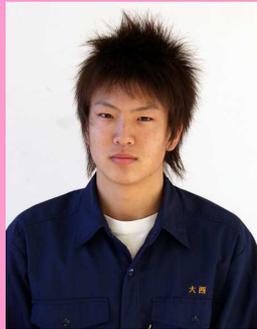
実施地区：日本海地区 実施期間：平成18年5月9日～11日、9月12日～9月14日

平成13年度から始まった漁村交流現地派遣事業は6年目となり、今年度が最後の体験となりました。

今回の貴重な体験は、漁業後継者として活躍してから、その思い出と技術が活かされてくるものと考えています。

受入れにあたっては、漁業士の方々も不安があったことと思います。学院生の中には、お世話になった漁業士の方を「青森の母さん、父さん」と親しみを込め、親身に指導していただいたものもあります。漁業士会日本海支部の山下会長はじめ受入れ頂いた漁業士の方々並びに連絡調整していただいた鱈ヶ沢水産事務所には、あらためて感謝申し上げます。

各自の感じた思いの一部については、「浜風」の紙面をお借りしてご紹介いたします。学院生の素直な感想をご覧きたいです。最後に、学院生たちは、3月14日の修了式で雄々しく「海の男」への第一歩を踏み出しました。今後ともこれまでの学院生たちに引き続きご指導、ご鞭撻をよろしくお願いいたします。



大西 勝人

5月9日、9時に海洋学院を出発して、三沢漁協に寄った。三沢の漁港は広くて、イカ用のベルトコンベアもあった。荷揚げ場には、たくさんの魚が揚がっていた。ヒラメやフグ、天然のホタテなどが並べられていた。次に増養殖研究所に行った。館内には、マダラやカレイ、ウスバルの稚魚が水槽にたくさん

入っていた。増養殖研究所では稚魚を3センチまで育ててから組合に受け渡すそうだ。組合ではそれを5センチまで育てて放流するそうだ。増養殖研究所で昼食をとってから、鱈ヶ沢へ向かった。鱈ヶ沢の役場で漁村交流の開会式をやった。それから、受け入れ漁業者の神馬さんの家に行った。次の日の4時起床して沖に行った。エビカゴを150を3セットやった。船内は常にくさかった。午後2時に帰港。遅めの昼食をとって、鱈ヶ沢に帰った。全体通して疲れた。



金谷 宏二郎

漁村交流で鱈ヶ沢の方に行きました。その前に最初は、三沢漁港を見てその次は、平内にある増養殖研究所を見ました。ここでは、マコガレイなどの小さい魚から育成していました。ほかにもいろいろと見ました。そして2時に鱈ヶ沢に来てから、世話になる漁師に会ってそれから最初は、なんにもやりませんでした。

そして次の日に、7時に起き8時30分に出ました。沖に行くまでにいろいろと教えてもらいました。日本測地計や世界測地計など、レーダーをいろいろと、あと沖で操じゅうなどさせてもらいました。何キロではしるとか。そして、沖につき船を止め「なわ」を海になげトロールをやって何十分かして機械でなわをあげ、なわをあげるとき機械のモニターを見てあと何メートルで上がるとかありました。1回目はあまりとれず2回目は、意外にも1回目より大漁で良かったです。



川口 貴大

春は2人で行きましたが今回は、長井君がやめて、1人で行くことになりました。

最初は不安でしたが、春と同じ場所だったのでけっこう楽でした。

1日目は、何もしませんでした。

2日目は、5時半に起きて船に行きました。はじめは船に網を積みました。平行に積むのが難し

かったです。本当は網を積むだけの予定だったのですが、網も入れることになりました。学院でやっている網よりかなり大きいのでやり方があまりわからなかったけど、いろいろ教えてもらって、だいたいわかりました。

3日目は、はりの調整などをやりました。僕が行った所はとても良い人ばかりでとても話しやすかったです、仕事もやりやすかったです。

本当にいい体験をしました。



木浪 佑悦

自分は今まで、ホタテ養殖と定置網の知識しかありませんでした。あとは知識として、八工縄漁などいろいろありますが、エビかごという漁法は今回初めて経験しました。エビの習性を、見事に利用した、仕掛けだと思いました。自分がかごの仕掛けを見た瞬間、定置網のシステムとかぶりしました。

一度入るとなかなかエビが出られないようになっていました。さらに自分は新しい経験をしました。ウチは長くて3、4時間ほどしか沖に出ません。それに比べて、今回のエビかご漁は10時間も沖に出ました。10時間も沖にいたことがない自分は、陸についてからもまだゆれている感覚におちいり、フラフラしてしまいました。船は慣れているので、酔うことはありませんでしたが、とても疲れました。

秋では戦力になれるようにがんばりたいです。



佐藤 恭充

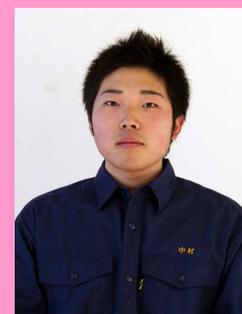
5月9日この日から僕たちの漁村交流が始まった。

1日目は三沢漁港を見学したくさんの魚を見ました。ヒラメやアンコウやフグやカレイなどが沢山揚がっていました。

それからバスに乗り鰯ヶ沢まで行きました。それから、三ツ谷さん宅にお世話になることになり

ました。三ツ谷さん宅ではその日は仕事がなく、長谷川さんと僕はコンビニをさがしにぶらぶら歩いて、その後、三ツ谷さんの家に帰り、鰯ヶ沢の温泉につれていってもらって温泉から帰り、三ツ谷さんの家で鯛の刺身と鯛の煮付けを食べてとてもおいしかったです。

そして次の日朝4時20分ごろ起きて4時30分過ぎに網を入れに行き9時過ぎに帰ってきて朝食を取りました。9時30分ごろに船に網を積みに行きました。2時ごろに終わり、昼食の焼き肉を食べ、三ツ谷さんたちとお話をして東奥丸に行きました。三ツ谷さんにはとてもお世話になりました。



中村 寿秋

5月9日から11日まで漁村交流をした。

まず、9日は、三沢漁港と平内の増養殖研究所に行った。三沢漁港は、鰈、鯉、桜鱒、帆立、アブラメ、鱒ノ助、河豚、鮫鱈、カニなどいろいろな魚が揚がっていて、すごいと思った。又、魚を直接、地面に置かず、衛生の面でも、力を入れているすばらしい所だと思った。次に、平内の研究所に行った。そこは鰈とウスメバル、真鱈の養殖をしていた。稚魚はとても小さかった。鰯ヶ沢に着いて、漁業士の家に行った。家の人はとても優しくかったです。晩飯は、焼き肉を食べた。とてもおいしかったです。

10日、朝4時半に起きた。船に乗り出港した。とてもいい風だった。朝日が山から昇るのがすごかった。漁場までは、30分位走った。漁場に着くと、船上が忙しくなった。ポンデンに付いているロープをドラムで上げて、網を揚げた。その後も二つ揚げた。網には、鯛、鰈、鯉、蛸、河豚、ソイ、槍烏賊、ホッケ、鱈が入っていた。石沢さんは、「これだけ全然入っていない。」と言って、沢山入る時はどれだけ入るのか、次に行くのが楽しみです。東奥丸は大きかった。船長はすごく優しい人だった。刺身もうまかった。

11日は、鰯ヶ沢を出発して、酸ヶ湯に行った。とてもいい湯だった。また、行きたいです。次に行く時は、もっと、技術を身に付けていきたいと思

います。

います。

長谷川 勢也

5月9日、鮫から鰯ヶ沢に向けて出発。

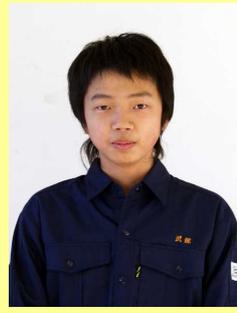
まず、三沢漁港を見学した。市場に行って見たら、魚がたくさんいた。特にめずらしい魚はいなかったけど、三沢の市場は、地面に魚を置かないという所に驚いた。三沢を出発して、平内町増養殖研究所に行った。そこでは、タラやマコガレイなどの稚魚を育てていた。一つの水槽に約3~4万匹いたらしい。その水槽が4~5つあった。マコガレイが約12~20万匹いる計算になる。タラの水槽は3~4つあった。そこで昼食を食べて、鰯ヶ沢へ出発。鰯ヶ沢の役場について開会式をした。自分と佐藤がお世話になる、三ツ谷栄子さんはなかなかイイ人で、いろいろ話をしてくれた。主人は、最初無口だったが、少しづつ話をしてくれた。主人は昔、八雲で仕事をしてたという事もあって、結構話が合った。その日は9時半まで話をした。次の日は朝、4時半に起きて、船に網をつんで、入れに行って、またつんで、終わった。三ツ谷さんは自分達をたくさん褒めてくれた。次は秋に同じホームステイがあるそうなので、その時は、もっと褒められるようにがんばりたいと思う。



武部 洋軌

1日目は、中村・船橋ペアと一緒に仕事をした。ロープを船に上げて網をトラックに乗せて山へ持って行った。

2日目朝5時30分に起きて山に行き網のおもりを固定したあと網をトラックについているクレーンみたいなもので引っ張りまたおもりを固定する作業を夕方4時

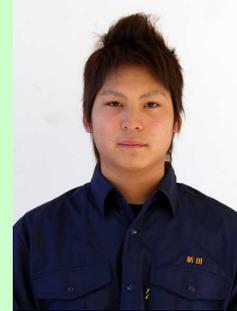


までくり返した。家に行き大川家(中村・船橋ペアがいる家)に行きバーベキューをした。自分と中村と西崎と大川さんと準備をした。肉を焼くとき中村と西崎と自分だった。船橋は何もせず食べていた。船橋がおでんをこぼした。船橋は、片付けにどこかに行った。結局中村が片付けた。大川さんの家の近くにあべ口の犬がいた。見にいいたら吠えられた。大川さんと山下さんと話して楽しかった。初めてブリコを食べた。うまかった。山下さんの中3の女の子が船橋が一人で笑っていると言って中村と西崎と自分と大川さんの奥さんが笑った。大川さんがギャグを言って楽しかった。

3日目は、朝5時30分に起きて山にいった2日目と同じ作業をした。作業の途中で中村ペアが来た。最後にフロートをつける縄を網に付けた。昼ごはんを食べて昼寝をしてバスまで送ってもらった。3日間は短かった。

新田 大規

秋の漁村交流はあまりやる事がなかった。でもいろいろな所の見学やいろいろな所の漁港を見ることが出来たので、良かったです。



1日目は、鰯ヶ沢漁港にむけて八戸を出発しました。昼に付いたところは、アップルヒルというところにとまってごはんを食べました。そして1時ぐらいに鰯ヶ沢漁協について自分達が行く今弘樹さん宅に行きました。最初家を見たらすごい家でした。

2日目は、午前前にアンカーとたまの片付けをしました。あと新しいロープのよりもどしをしました。結構難しかったです。あと夕方に温泉に行って入ったらかなり熱かったです。

そして、最後の3日目は、十二湖に行きました。結構遠くてほとんど海沿いを走っていました。それで山に登っていったら湖が見えました。青池という所には行かなかったけれど青池の話聞けばその池だけほんとうに青い池なんだとしゃべっていました。いろんなところをかなり見れたので良かったし、楽しかったです。

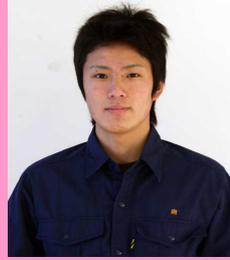


船橋 将昭

2回目の漁村交流が始まりました。今回の受け入れ漁業者は大川昭一さんであった。

一日目、まず網や縄を西崎、武部組も一緒にやりました。2日目は土俵六十個入れました。そして定置網は海洋学院がやっている定置網のより小さく沖からすぐ近い所でイカやヒラメ一番多いのがフ

グですが小さい定置網ですから、5センチサイズしかとれません。あとロープワークもやりました。その夜西崎、武部組も呼んでバーベキューを楽しみました。最終日は7時に起き朝食をすましてから土俵を入れました。土俵のひもの結び方や土入れや大変でした。そして最後に小さい船に乗って定置網を片づけました。そこでタコを2匹釣りました。すべての日程を終え、ソフトクリームを食べ、イカ釣り漁船を見て、メゴの乾燥を手伝いました。帰りの途中イチョウの木を見学しました。大川さんには感謝しています。

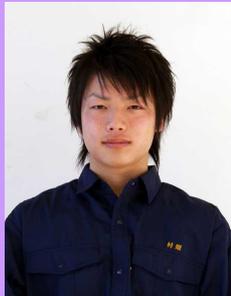


南 加寿也

海洋学院を出発して、始めに三沢漁港で水揚げされている魚達を見ました。その中には僕が初めて見た「マスノスケ」、「トラフグ」など数々の魚があり、驚きました。

次に、平内町にある増養殖研究所に行つてウスメバルやマコガレイ、ホタテ、マダラの養殖現場を見学しました。そして、僕は、青森県内では、色々な種類の魚達が養殖されている事を知りました。昼食は、研究所の隣にある屋敷で飯を食べて、そこから、またバスに乗って鱈ヶ沢役場まで行きました。そこでは、漁業士宅で漁業体験する前の挨拶をして、漁業士の家に向かいました。家に着く前に早速、浜で仕事をしました。仕事を終え、おいしい夕食を食べ、風呂に入つてちょっとテレビを見てすぐに寝ました。次の日は朝4時半頃に起きて5時頃に沖に出ました。その船は「三詔丸」という船名でエンジンは「ヤンマーディーゼル」の650馬力。全速力で31ノット出る6.2トンの底建網船でした。潮が速くて魚の通路が絡まって閉ざされていました。しかしなかなか見れない大型のタイやトラフグなどが獲れました。沖の帰りに、僕と新田に操縦をさせてくれました。おもしろかった様でプレジャーがかりました。2日目は、青森県調査船「東奥丸」に泊まり、最後は、東奥丸の船員に見送られ帰りました。

たいへん疲れた2泊3日の漁業体験だったが自分が得たものはたくさんあったので良かったです。早く秋になって欲しいと思いました。



村畑 繁樹

漁村交流で鱈ヶ沢に行く前に、三沢漁港と平内町の増養殖研究所を見学してきました。三沢ではホタテやマス、アンコウやフグ等を見て、自分達もホームステイ先ではこんな立派な魚介類を捕れればいいと思いました。平内では初めてカレイの稚魚を見て、とても感動したし良い経験ができたと思いました。

鱈ヶ沢に着いて、自分達は青鵬丸にお世話になりました。予定では、十三湖の方に行く予定だったのが急が変わったので船に泊まることになりました。船酔いする自分は少し不安でした。でも青鵬丸のような大きい調査船に乗る機会などそうあるものではないのでうれしくも思いました。そして翌日沖に出て途中運転もさせてもらいました。わかりやすいアドバイスのおかげで目的の針路を進むことは普通にできるようになりました。目的地に着いたのは昼前で、思った通りそのころには自分は酔ってしまいました。でもそれで休んでいると他の船員に迷惑だし、せっかくの機会ももたないと思ったので、少し無理して頑張りました。黙っていてもあんまり仕事を言いつけられないし、自分から動かないとだめだったので、漁業だけでなく社会の厳しさも学べた気がします。そしてやっと仕事が終了しました。色々な魚が獲れたし、良い話も沢山聞けたし、学んだことも多かったため、今回の漁村交流はとても有意義だったと思いました。次回はもっと成長した自分の力を発揮できたらいいと思います。

ホームステイを受け入れて（漁業士会・日本海支部会）



鱈ヶ沢漁協 生駒 司

学院生2名を5月に受け入れ、網の修理などを任せました。学院に入学して1ヶ月ほどしか経っていないため技術は未熟でしたが、漁師をやっていくという彼らの熱意はひしひしと感じ取れました。私も十年程前に海洋学院の前身である水産修練所の生徒として励んでいたため、入所当初の自分と重ね合わせ「自分もその程度の技術しかなかったな」と懐かしくなりました。今後の彼らの成長に期待します。

鱈ヶ沢漁協 三ツ谷 栄子

女性漁業士として初めて受け入れを行ないました。初めはどのようなことをして良いのか分からず、非常に不安でした。しかし、いざ受け入れた生徒に網入れや網修繕などを手伝ってもらおうと、率先して仕事を手伝い、不安もどこ吹く風となりました。生徒は、今時の何をしてよいのか分からない若者とは違い「いか釣り・マグロ釣りの船頭になる」という目的をしっかりと持ち、漁業後継者としての頼もしさを感じました。立派な漁師となった彼らとの再開を心待ちにしています。





大戸瀬漁協 山下 幸彦

5・9月の2回学院生の受け入れを行ないました。学院生は5月に比べると9月には技術面・体力面とも高くなっており、漁師の手伝いがすんなり出来るほどに成長していました。その成長を見て、今後の漁業を支えていく若者が抵抗無く漁業に従事していくためにも、海洋学院のような漁業後継者育成機関が必要であり、また、我々漁業者も若者が安心して漁業が出来る環境を整える必要もあると感じました。学院生には現状に満足するのではなく、より一層向上心をもって頑張ってもらいたいと思います。

大戸瀬漁協 大川 昭一

9月に学院生2名のホームステイを引き受けました。サケ定置網の土俵入れ及び網換え、ボンデンの名入れを体験してもらいました。学院生はまじめに取り組み漁師への興味が非常に高いことが伺えました。また、技術が高く即戦力になると感じました。ホームステイの体験を活かし、立派な漁師になることを願います。



赤石水産漁協 今 弘樹

私の家では底建網を営んでいますが、学院生を受け入れました9月は休漁期であり、何を体験してもらうか非常に悩みました。結局、漁具倉庫の掃除やロープのよりを戻す作業の手伝い、作成中である底建網をみてもらったり、その他の漁具等についての使用法などを教えました。漁業の実践に結びつくようなことを、ほとんど教えることが出来なかったのが心残りですが、今回の体験を心の片隅にでも置いてもらい、頑張ってもらいたいです。



十三漁協 小倉 広起

海洋学院最後の学院生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。この1年間、各種の漁具漁法など、学ぶことが沢山あり大変だったと思います。私の子供も学院生同様、漁業の道に入りました。仕事面では、始めは不慣れでも日々経験を積み慣れると思います。何の仕事でも朝起きるのがつらいと思いますが「がんばって」。それが実れば、楽しい時も来るはず。海は日々違います。漁業は毎日が勉強です。たくさんの経験を積んで立派な漁師になって下さい。最後に学院長をはじめとする先生方、海洋学院最後の生徒を育てていただきありがとうございました。

岩崎漁協 石沢 秀雄

5月に受入れを行い底建網の網おこしを体験してもらいました。初めは、学院に入学して約1ヶ月程度しか経っていないため役に立たないと思っていました。しかし、即戦力とまではいきませんが、船上での立ち回りや網を引く手つきも良く漁師の片鱗を感じました。今後も色々なことに興味を持ち、そして経験し、たくましい漁師となってください。



岩崎漁協 神馬 達雄

5月受入れ時にはエビ籠漁の体験を、9月受入れ時にはエビ籠漁が休漁のため、漁業とは関係なく生徒には申し訳なかったのですが、稲刈りの手伝いをしてもらいました。



深浦漁協 斎藤 光秋

前期(5月)は小型定置の網おこしの手伝い、後期(9月)は小型定置の網入れの準備を手伝ってもらいました。





「青森県漁業士会」との三年間 田中俊輔



この3年間（平成6～8年）は私に多くの思い出を作ってくれました。実は、昭和62年以来、転勤希望を漁業士会担当の「水産業専門技術員」に出し続けましたが、願い叶わずで、漸く6年目にして専技の椅子をGETしました。これは私にとって始めて「ネクタイ締めて」の県庁内、所謂本庁勤務でもありました。

専技在職中に三つの新規事業を立ち上げたことが忘れられません。そのうちの二つをご紹介しますと「漁業後継者海外研修事業、（明日に向かって世界

にはばたく）平成7～11年」では、初年度に青年漁業士4名をいきなりスペインの大西洋岸にあるガルシア地方に派遣しました。一名を除いて全く海外経験のない4人組が、アムステルダム乗り継ぎ、マドリード空港で現地ガイドと落ち合う迄全くの単独行動でした。「成田空港のホテルに無事行けるだろうか」から始まり、青森空港出発ロビーでは搭乗アナウンスが終わりかけているにも拘わらず、真剣な打ち合わせが続きます。

しかし、度胸一番の漁師です。出発前の心配は全く杞憂に終わりました。1週間後、青森空港に出迎えに行きましたら、Nさんが私の顔を見るなり、開口一番「田中さん！良かった。是非一度、田中さんも行って見たらいい（標準語訳）」と興奮さめやりません。この研修の顛末は他にもいろいろありましたがここではほんのさわりをご紹介します。

「森と海づくり運動推進事業 平成9～13年」では漁業環境保全運動の一環



として海の生産性向上を図りつつ、漁業者の社会参加も促すために広葉樹を植林しました。また、この運動を広めるための講演会、漁協婦人部（当時）の研修等も併せて行いました。

ここではほんの一部をご紹介しますでしたが、専技の仕事は実に変化に富み、多岐に亘っていました。私自身は青森県の漁業を背負って立つ、若い漁業者とのお付き合いを大いに楽しむことができました。

退職後は家でごろごろしています。多分今頃は家の隅で粗大ゴミ化しているでしょう。皆さんに声をかけて頂ければ喜んでお伺い致しますのでよろしく願います。（註：もう一つは「町の子・海の子なぎさの教室開催事業 平成8～12年」）

《平成18年度東北・北海道ブロック漁業士研修会 参加者報告》

平成19年1月23日 札幌市第2水産ビル



むつ支部会 向井 正喜

この度、平成18年度東北・北海道ブロック漁業士研修会へ参加する機会を得たため、漁業士会むつ支部会会員6名と共に出席した。

開会の後、次第に沿って行われ、研修会の後、全体の交流において青森県から畑中漁業士が青森県の漁業士会活動を発表した。

東北、北海道の漁業士と情報交換することができ、非常に有意義な研修会であった。また、各県の漁業士会の概要や活動内容を参考にし、今後も地域に根差した活動を行っていきたいと思う。

三八支部会 深川 修一

初日の記念講演では、北海道漁連の宮村正夫副会長が「北海道漁業の動向と課題」と題して講演した。主魚種の秋サケ、ホタテ等の浜値が魚価安から生産者も費用を抛出し、流通対策の

一環として輸出対策をし、需給調整に努めた結果、平成16年以降回復傾向にある。

輸出金額も平成12年が6億4千万円であったものが、平成16年213億円、17年259億円、18年300億円を突破する。数量ベースでは、秋サケが平成17年65,000トン、ホタテ6,025トンと年々増加傾向にある。また、中国には北海道漁連の大連と上海事務所が開設されていると聞き、その積極性に驚くばかりです。そうした中で、欧米や中国の「魚食」普及が進む中、国内の需給変化は安全・安心な国内志向の水産物に価値が高まっており、産地表示の定着化等を推進し今後も「浜と一体になって取り組むことが大事である」という言葉で締めくくったことが印象的であった。

全体交流会では、北海道海域での「大型クラゲ」の被害状況を質問したが、明確な回答がなく、日本海海域と噴火湾海域であったが、日高、オホーツク海域では見られないということである。その後の親睦交流会で同席した水産部技監 岡崎氏に「大型クラゲ対策」について質問したところ、被害はあるが青森県ほどの被害ではない。改めて悔しい気持ちでした。

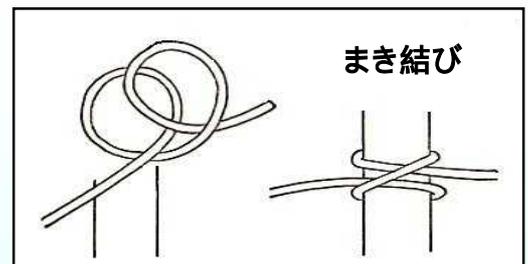
2日目の全道青年・女性漁業者発表大会では八雲町漁協青年部の取組みで「ブナ鮭を遊楽部熊鮭」のネーミングでブランド化し成功を納めた事例は大変いい勉強になりました。

帰路の前に、札幌駅前の佐藤水産に寄ったら鮭製品の多さにビックリ！！また、自社でもすばらしく立派な鮭が水揚げされることから、「鮭児」あるか問い合わせたところ、一切れ4,500円（200g位）、一尾で10万円と聞いてビックリ、残念ながら在庫がなく諦めていたが、東急デパート地下の丸亀水産で一切れ（120g）3,500円の羅臼産鮭児2切れを購入し、満足！

今回の研修は、人との出会いと道水産の大きさを勉強させられた有意義な研修会で、今後の活動に役立てたいと思います。

漁業研修コース研修生（賓陽塾 塾生）募集のお知らせ

これから漁師になりたい人、漁師の跡継ぎになりたい人のために、新しい取組みがスタートします。



募集定員 10名

研修内容及び期間

- ・通常研修期間（5月から7月まで）
講義：青森県の水産業、漁業関係法令など
実技：沿岸漁業実習、ロープワーク、水産救助訓練など

通学方法 ・原則通学制（事情によっては所内の研修棟に宿泊可）

費用負担 ・教材費や水道光熱費など一部負担あり

応募資格 ・漁業者又は漁業への就業を希望する県内出身者（年令、性別不問）

研修場所 ・青森県水産総合研究センター・増養殖研究所
青森県東津軽郡平内町茂浦字月泊10

問合せ先 青森県水産総合研究センター・増養殖研究所

電話：017-755-2155

FAX：017-755-2156

郷土の逸品!

エゴテン



乾燥したエゴテンを適量の水に30分くらい漬けます。その後、弱火で30分ほど煮ます。煮ている最中は、常にかき混ぜ、煮終わったら、たまねぎの袋や金網などの網状の物でこします。次に、タッパなどに入れて冷やして固めて完成です。

食べる時は、食べやすいように切って酢醤油で食べるといいでしょう。お好みでマヨネーズや生姜を入れてもいいです。

しながわ汁



しながわ汁は、川内地区以外のどの地域にも見あたらない、川内だけの名物料理として親しまれています。地元では、主に仏事の際に作られる精進料理として食べられています。由来は、人名説と地名説とが

あり、人名説は「品川弥二郎」という人がおいしいと言ったからという説。地名説は東京品川にちなんだ説で、江戸時代、川内から出た船が難破したとき、船乗り達がたどり着いた品川で、地元の人達が作ってくれた料理によって命拾いし、

川内に帰ってから感謝を込めて「しながわ汁」と名付けた、ということですが、定かではありません。

作り方

こんぶ・煮干でだし汁をつくる
豆腐はすり鉢ですりながら、味噌を混ぜよくすりつぶす。
すり豆腐をザルに入れ、だし汁をかけてこしていく。粗くてつぶせない分は、再度すり鉢ですり、同じ作業を繰り返す。
ナラタケを入れ、中火でかき混ぜながら20分程度煮る。(豆腐のなめらかさを保つため、煮立てない。)
味を調え、高菜のみじん切りをのせる。

ご意見、ご感想をお寄せ下さい。

青森県漁業士会「浜風」編集委員会

事務局：青森県農林水産部水産局水産振興課内

〒030-8570 青森市長島一丁目1-1 : 017-734-9592

(編集後記)

今回は、たくさんの方々から原稿をお願いしました。2回に分けて発行する予定でしたが、お忙しい方が多く、この時期にまとめた発行となりました。また、海洋学院生の感想文は、今回が最後となりました。18年度の学院生は、あいさつもよく、漁業への取組姿勢が優れていると、近くの浜で活動している漁業者から高く評価されていました。何年か後に、彼らが新会員としてこの誌面に登場することを期待しています。(采田)

大盛りの浜風です。岩礁域から砂浜域、沿岸から沖合まで、さまざまな漁業者の方々が活躍していることを改めて感じさせてくれました。漁業士を先頭に、海洋学院最後の卒業生が続き、水産県・青森を支える力になってくれることを期待しています。(清藤)